

対談

キラリ☆女性が
輝く社会へ



—それぞれ異なる業界で活躍されている3人の方たちにお集りいただきました。まずは自己紹介をお願いします。

佐藤えりなさん(以下佐藤) 建設業で働いています。高校を卒業して上京し、接客業で数年働いてから地元に戻ってきて入社しました。機械に乗りたくて入ったのですが、会社から「現場監督を目指してくれ」と言われ、現在資格を取りながら施工管理の現場監督を目指しています。

菅原江里子さん(以下菅原) 出身は潟上市昭和です。もともと動物が大好きで、大学の獣医学部で4年間学びました。卒業後地元に戻ったのですが、なかなか仕事が無く、オーストラリアに渡り自然保護団体にボランティア活動に参加しました。帰国後、畜産技術の指導員の職につき、セラピストの資格を取りサロンを営みましたが、東日本大震災をきっかけに芸術活動で東北を支援したいと思い、サロンを閉めて上京しました。帰郷後、もともとのづくりの世界にすごく興味があったのですが、協力隊として、川連漆器職人の募集があったので応募し、今に至ります。

藤山里子さん(以下藤山) 市内三関でサクランボとリンゴを主にやっている果樹農家に嫁ぎました。私は高校を卒業して、税理士事務所に7~8年勤めた後、酒屋にパートで行ったり、歯科医院の受付を10年やりましたが、義父が体調を崩したことで、思い切って退職し家の仕事に就きました。農家なので冬になると時間を持て余し、どうしようかなと思っている時に、リンゴの乾燥をやっている人と知り合って加工に興味を持ち、3年前に県の補助金を活用して、加工所を建てて6次産業に取り組んでいます。

—今やっている仕事の中身について、大変だなと感じることなどがあったらお聞かせください。

菅原 伝統工芸の世界は本当に奥深くて、何十年もやっていらっしゃる職人さんの中に、いきなり基礎も何も知らない人が入ったので、いろいろなことで苦労がありました。職人の方からすれば、地域おこし協力隊の任期が3年と決まっています、何十年というキャリアを積むのが普通の世界で、たった3年で教えられるものじゃないという気持ちがあったものと思います。

佐藤 建設業も3K、キツイ、汚い、危険と思われていて。女性だけでなく、今の若い子たちがそう思っていて、休みも少ないし…。ほとんど年配の方が多くて、その人たちが引退した時に後を継いでいく人たちがいない。それまでは、今があれば大丈夫みたいな感じで進んできた感じがするんですね。だから女性も入ってこなかっただろうし、イメージはやっぱり良くなかったんだと思います。

藤山 家の仕事をしても勤めていた頃のように給料がもらえるわけではないし、定期的に入ってくるお金が無いという不安は常にあります。お天とうさん相手の仕事は本当に大変。冬くらいはゆっくりできるかなと思ってても黙って家にいるのも居心地が悪く



て、何か家でできることはないかなと考えたときに丁度、リンゴ乾燥をしている人と出会いました。それから菓子製造業の営業許可を取って、加工所を建ててという感じで。でも、それまでは何も作ってこなかったから常に試行錯誤です。

—女性ならではの役割や、女性の感性が活かされていると感じることはありますか？

佐藤 コミュニケーションの面で役立っていて、頂いた仕事を進めていくときに、相手の方と綿密に会議や打ち合わせをするんですが、女性だと話しやすいと思ってもらったりしているようなので、仕事も進めやすいですし、こちらからお願いする時も聞いていただくことが多いと感じます。それに、男性同士だと言葉が多少荒い場合もありますし。そういう点では、現場の中の潤滑油やクッション材になってるかなと思いますね。

菅原 最初の頃は師匠も戸惑いがあったと思うのですが、ほとんど毎日通って一日中一緒にいるので、師匠が機嫌のいい時とか悪い時とか全部分かるようになって、今では、何でも言えるって言ってくれますね。女性に対して師匠は「あんまり自分からは話しかけない。」って言うんですけども。「オメにだけは違う。」って言って。その点では本当にちょっと近くなれたのかなって。自分ではあまり意識はしてないのですが、作品が新鮮だと言われますね。やり方についてもそうだし、描く絵のモチーフとかも女性的だと言われます。職人さんだったら絶対描かないようなものを描いているので。今年、「川連塗りフェア」に40数点出したのですが、それがいい結果になって表れました。私の作品を初めて見るお客さんたちは、「面白い」とか「珍しい」とか「かわいい」って言うんですよ。そういう風に言って頂けて、感想も聞けたので、嬉しかったですね。



藤山 菅原さんは、女性が欲しくなるようなものを作っているように感じます。イメージ的に川連漆器は、高くても買えないというか。お話から、菅原さんの作品は女の人の方が買いたくなるような、手に取りやすいデザインなのかなと思いますね。

りんごチップスは、県南で作っている人達が結構多くて、みんな普通の透明な袋に梱包しているんですね。うちのリンゴは、夫が10年位前に種苗交換会で県知事賞をもらったんですよ。それで、「うちのリンゴおいしいんだよな。」と思って、りんごチップスはこだわって作っているんです。だから、普通の透明な袋ではなくて、ちょっと違うものにしたいと思い、デザイン会社の人に頼んで、食べきれないときや飾るときのことも考えてパッケージを作りました。



—社会に「ここを変えてもらえば女性がもっと働きやすくなる」と思うことはありますか？

佐藤 男の人も育休が取れますが、なかなか普及していないと思います。取りづらいし、会社でも「え、取るの？」みたいな状況で。取るのが当たり前という流れになってほしい。「はなこまち」という建設女子の会があるんですが、その会に参加すると、女性の悩みが話せるので、分かってもらえたというだけでも嬉しくなります。そういう会がどんどん増えてくると、「女性も頑張ってるぞ!」ということがアピールできると思います。

菅原 伝統工芸とかそういう世界は、徒弟制度という住み込みで技術を学ぶというスタイルで、それが普通だったのですが、最近は学校も増えてきて、学校で学ぶスタイルに変わってきているんです。女性もそういう世界に入っていき人も増えているのは事実ですが、結婚や子育てを考えた時に、どうやってその時対応ができるのかなと考えると確立されていないので、それはこれから必要ですね。

藤山 若い女性達が長く仕事を続けていけるように。女性が頑張っていることを案外知らないというか。湯沢にもこうやって頑張っている女性たちがいるんだっていうことをもっと周知して、もっと湯沢市民が知らないといけなと思いますね。頑張っている人達を摘まないで育てていく社会になるのが一番いいですね。

—今後の目標をお聞かせください。

菅原 例えばクラフト市に出したりだとか、個展開催は最初の頃から決めているので、それに向けて準備していくつもりです。あと、師匠にお話しして、展覧会に出品する予定です。

藤山 手伝ってくれる友達がいるので、そういう人を将来的には雇用できるようになればいいなと思っています。知らない人のほうがまだ多いので、ちゃんと広めていかなきゃいけないですし、くじけず売られ続ける商品にしていきたいですね。

佐藤 女性が少ない職場なので、仕事としては現場監督になるのが一応ゴールと言えばゴールなんですけど、その先といえば、ロールモデルになれるように、育児も家事もやって、仕事でも現場監督がやれるよというのがアピールできるようになりたいです。

